

## 21 障害のあるなかまや家族、職員によりそうことをあきらめない

萩原 はぎわら  
政行（社会福祉法人日和田会理事長）



### 「権利としての教育」や障害児教育への関心…◆

小さいころからの夢であった教員をめざして、一九七二年に教育系大学に入学しました。ですが、当時は学費値上げ反対闘争や学園民主化闘争の学生運動が盛り上がりつつあり、私も自然にその運動に参加していたので、あまり専門の勉強には身が入らなかつたように思います。

そのなかでも、養護学校教員養成課程の学生を中心に、不就学をなくすとりくみの一環として、学校に通えない子どもたちの日曜学校や家庭訪問活動等を実施しており、私も海で泳ぐ会などのレクリエーションに

参加していました。また、大学のさまざまなゼミに積極的に参加するなかで、「権利としての教育」や障害児教育への関心はあり、「国民の教師たれ」（三上満さん）の訴えに共感していました。

### なかまと生徒に支えられ、充実した教員生活…◆

大学卒業後、教員採用試験に合格できず、自宅でアルバイトをしながら過ごす日々がつづきました。そんな時、先輩の紹介でろう学校に臨時職員（副担任）として働くことになりました。諸先輩方からの親切な指導や、生徒たちからも新米職員をいたわるように接してもらえたことなど、心の通った関係に本当に感動し

ました。これこそ私がめざした教育ではないかと思えました。

埼玉県にある「青い鳥福祉会」が主催した「発達保障講座」にも私をふくめ多くの養護学校の教員が参加し、校内では若い教員を中心に「障害児と遊ぶ会」を、ほかの養護学校の教員と一緒に担うことになりました。

その後の一〇年間、転勤もしましたが、いつも一緒に活動した同僚の教員がいたためか、どこに行っても充実した教員生活を送ることができました。うれしかったのは、初めて担任したろう学校の生徒の仲間（なごとも）をしたことと、ある生徒からは「盲学校に来て一番よかったことは先生に会えたこと」と言われたことです。反面、障害者福祉の乏しさを実感することもできました。

### 法人の理念をまもるためには…◆

そのようななか、現在働いている障害福祉サービス事業所「かわせみ」に当時の施設長より声がかかり、障害者施設で働けることによるこびを感じていました。一九八九年前後は、障害者の働く権利を保障する運動のなかで、小規模作業所が全国各地に生まれ、「かわせみ」のある日高市の周辺でも同様でした。しかし、自治体のわずかばかりの補助金や募金、バザー、コン

サートで得たお金で運営せざるを得ない経営状況のなかで、働く職員の給与や労働条件はたいへんきびしいものでした。そんななかでも、職員全員の合意のもとに「どんなに障害が重くても、本人・家族が希望するならしっかりと受け止める」ことを理念として掲げ実践してきました。同時に、制度そのものの改善や、労働組合の結成、親とともに対県・市交渉等にとりくんできました。地域からも高く評価されています。この理念は、今も法人運営の柱となっています。

しかし、現在は理念を実現しつづけるためにはあまりにもきびしくなっていると強く思っています。とりわけコロナ禍のなかで、国から十分な支援がなく、事業運営がきびしい現状にあります。

また、事業所では強度行動障害のあるなかまの増加や高齢化により、医療的ケアの必要ななかまへの手厚い支援が求められています。政府はそこにはまったく手を当てていこうとはしていません。この問題は一事業所の問題ではなく、国の政策に根本的な原因があります。私は、障害のあるなかまや家族一人ひとりのねがいや働く職員によりそい、よりよい制度にしていこうと構えて、ひきつづき事業を運営していきたいと強く思っています。